

陳舜臣さんを語る会通信

NO.31 Feb. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年2月10日

陳舜臣さん最後の小説『曹操残夢 魏の曹一族』

『曹操残夢 魏の曹一族』は本通信27号で紹介しています。本号では本論から入ります。(編集委員 橘雄三)

中央公論新社『曹操残夢 魏の曹一族』
「あとがき」から

文中、傍線は編集委員加筆

(前略)

多くの三国志物語は演義に依拠している。蜀漢を正統とする立場で書かれている。とうぜん曹操は篡奪者であり、歴史の悪役として登場することが多い。

私は『秘本三国志』で、いささかその傾向を訂

正したが、そのころからこんどは曹操を中心とする歴史の渦を書いてみようと思っていた。

史料から史上の諸人物の肉声が、じつさに伝わってくるのは、三国志の場合、曹操父子と諸葛孔明だけである。彼らは作品を残していた。曹操は……(中略)。

息子の曹丕も……(中略)。詩は父よりもすぐれている。

曹植の詩はさらに兄よりもすぐれている。

——陳思(曹植)の文章におけるや、人倫の周孔あるに譬う。

と、梁の鍾嶸は絶賛している。(中略) 実際には曹植だったのだ。

じつは私は曹植の愛読者であって、そんな人を小説にかくことに、深いおそれをかんじている。

(中略)

なお魏の禅譲を受けた晋は、魏の皇族にたいして、漢魏交替期より優遇したようである。漢のラスト・エンペラー献帝は、魏から山陽公に封ぜられた。これは果公にすぎない。(中略) 魏の廢帝

の奂は、晋から陳留王に封ぜられたが、これは郡王であった。二十で位を譲った奂は太安元年(三〇二)、五十八歳で死去するまで郡王であったのだ。

(中略)

王朝の末路を書くのはつらい。しかし魏の皇族たちは、それほどつらい目にも遭っていないようである。(中略) 曹操の子孫がこんなふうには、晋の八王の乱のような皇族同士の殺し合いを、横目に見ながら、おそるべき争いの外にいたことを、ほんとうによかったと思う。

(中略)

この時代は伸縮のはばの大きな時期であって、邪馬台国や倭が、中国の史書に登場しはじめ。世界がひろがりはじめたが、それは中国側からも日本側からもいえることであった。

辺境から歴史を見るという私の願いが、この小説の末尾ごろから、ようやく叶えられてくる。わくわくする作者のおもいが、読者に届くことを切に祈っている。

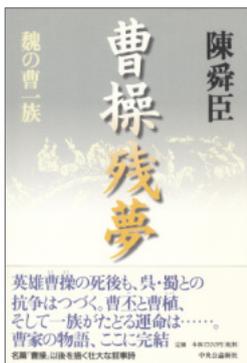
二〇〇五年六月

陳舜臣

八王の乱■中国の王朝晋(西晋)の滅亡のきっかけを作った皇族同士の内乱である。西晋は一〇〇年に渡る三国時代に終止符を打って全土を統一したが、その平穩はわずか数十年で崩れ去る。

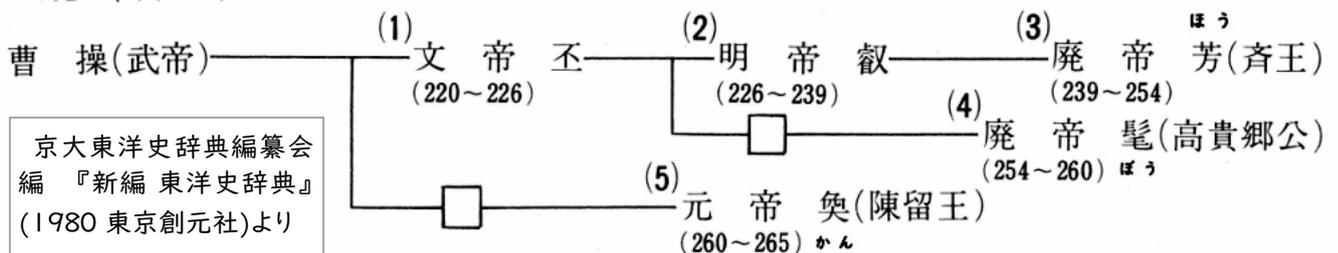
この後、中国は

隋が統一するまでのおよそ三〇〇年
にわたり、再び動
乱の時代を迎える
事となる。



(中央公論新社)

魏 (曹氏)



京大東洋史辞典編纂会
編 『新編 東洋史辞典』
(1980 東京創元社)より

『曹操残夢 魏の曹一族』年表と登場人物

《 1. 年表 — 曹操の死から晋の創建まで 》

《 2. 主な登場人物 》

| 西暦 | 事項 |
|-----|--|
| 220 | 曹操没し、子の丕嗣ぐ。曹丕、献帝から禅譲を受けて帝位に即く(①文帝) |
| 221 | 劉備、漢(蜀漢ともいう)を立て成都で即位(昭烈帝)、諸葛孔明を丞相とする |
| 222 | 漢軍、関羽の弔い合戦(夷陵の戦い)で呉軍に大敗。劉備、「夜に遁(に)ぐ」 |
| 223 | 漢の劉備没し、子の劉禪即位(後主)、諸葛孔明補佐する。 曹彰没す(不審死) |
| 226 | 魏の文帝(丕)没し、太子の叡即位(②明帝) |
| 227 | 諸葛孔明「出師の表」を奉り、魏討伐に漢中へ出陣 |
| 228 | 諸葛孔明「後出師の表」を奉る。漢、街亭で魏に破れる。孔明、馬謖を斬る |
| 229 | 呉王孫権、皇帝を称す。建業(南京)に遷都 |
| 230 | 丕、彰、植の母、太皇太后卞氏みまかる |
| 232 | 存霊であった甄(しん)氏みまかる 曹植没す |
| 234 | 魏の山陽公(漢の献帝)没す。諸葛孔明、五丈原に陣没。「死せる孔明、生ける仲達を走らす」 |
| 237 | 遼東の公孫淵、魏に背き燕王を称す |
| 238 | 魏の司馬仲達、公孫淵を伐ち敗死させる。魏、中国東北地域を支配下におさめる |
| 239 | 明帝没し、③曹芳即位。司馬仲達と曹爽が補佐する。 この年?存霊、紅珠みまかる 邪馬台国の卑弥呼の使者、洛陽に到着。 『三国志』では238年 |
| 249 | 司馬仲達、曹爽一派を粛清 |
| 251 | 司馬仲達没す |
| 252 | 仲達の子の師、大將軍となる。孫権没す |
| 254 | 司馬師、魏帝芳を廃して、文帝の孫、④曹髦(ぼう)をたてる |
| 255 | 司馬師没し、弟の司馬昭大將軍となり輔政の任にあたる |
| 258 | 司馬昭、相国となる |
| 260 | ④曹髦、司馬勢力に武力抵抗を發動しようとし、逆に殺される。曹操の孫奂(かん)即位(⑤元帝) |
| 263 | 漢後主劉禪、魏に降り、蜀漢滅ぶ |
| 264 | 司馬昭、晋王となる |
| 265 | 司馬昭没し、子の炎嗣ぐ。司馬炎、魏の元帝から禅譲を受け、晋朝を創建(武帝) |

| | |
|----------|---|
| 曹操と卞氏の子 | 丕、彰、植、熊(ゆう)。丕は魏の文帝。熊には一子、炳(へい)ができるが早死 『曹操残夢』では、植について一番多く語られる。その内容の一つは、甄氏への思い、恋慕の情。また、彰の死因についても多く記述されている。彰は、223年、洛陽の藩邸で急死、不審死とされ、憶測が流れる |
| しんし 甄氏 | 袁紹の次男袁熙の妻。204年、曹操が鄴を攻め落とすと、曹丕は甄氏を妻とした。曹叡(魏2代明帝)の母 |
| せつ節 | 曹操の娘で漢最後の献帝(劉協)の皇后。曹丕に禅譲し、魏の山陽公となっている劉協と穏やかに暮らす。近くに、紅珠の庵と甄氏の庵があった |
| こうしゅ 紅珠 | 実在の人物。曹操の従妹(名前はわからないので紅珠とした一陳舜臣)。皇后の一家として粛清の命令が出たところまで史実。粛清の命令以降は「存霊(死んでいないのに死んだことになっている人)」として生きる。曹操が少年時代、思いを寄せた女性で、曹操にとって、生涯、心安まる女性となる |
| そうちゅう 曹宙 | 架空の人物。紅珠の子という設定。「南台」とも呼ばれる。狂言回し。物語の終盤まで情報通として顔を出す。倭にも渡る |
| かんきん 灌均 | 架空の人物。もと、曹植を見張る「監国謁者(かんこくえつしゃ)」。この仕事を部下に引き継ぎ、曹宙と行動を共にする |
| しばい 司馬懿 | 字は仲達。魏の諸帝に仕え、蜀漢の諸葛亮と戦い、また、東北・朝鮮に領土を広げ、魏末、丞相となって実権を握る。「王朝を篡奪するのは悪逆無道の行為であるが、篡奪しなければ、司馬家はいずれ皆殺しにされるであろう」。孫・炎が晋を建てる |
| そうほう 曹芳 | 魏3代皇帝。「無残な最期をとげないためにはどうすればいいか。けんめいに考えた。皇帝の座について、十余年のあいだ、そればかりを考えていた」。女色で廃帝となる |
| そうぼう 曹髦 | 魏4代。「先帝のように廃されるという屈辱はたえがたい」。司馬氏に対して武力抵抗を發動しようとして露見、混乱のなかで没す |
| そうかん 曹奂 | 魏5代。「私で終わりにします。そのときはかならず血をみないように、しずかに幕をひくつもりです」 |



右手の道、突き当たり、こんもりした盛り土が孫権墓
南京、紫金山南麓(岩波新書『三国志の風景』より)

『曹操残夢 魏の曹一族』いくつかの補足

「曹操以後」の章より 曹操、後継者を丕 と決断

後継者えらびで、植に傾きかけた時期が、曹操にはあった。だが建安十三年(二〇八)の赤壁の戦いでみせた、丕の冷徹な敗戦処理のみごとさで、曹操は考えを改めた。

曹家のつぎの大仕事は漢にとって代わる魏王朝の創建である。これはふつうの人間にはできないことだ。

冷酷でなければ、自分たちの仕えた王朝を亡ぼすことはできない。

赤壁戦のとき、内応すると密書で言ってきた黄蓋が、じつは「佯降」(いつわりの降伏)であることに、曹操は最後に気づいた。それに対応する指示を与えようとしたところ、魏軍はすでにそれを完



ja.wikipedia.org/wiki/より

了していた。曹丕がすでに退路まで用意していたのである。(中略)

魏の後継者は、この私以外に誰がおりますか？

無言のうちに、曹丕はそう問いかけて、にやりと笑っているようだった。

(おれはこんなやつは、気味が悪くて、じつは嫌いなんだ。しかし、こんなやつでなければ、乱世のなかで、曹家に天命を受けさせることはできないのじゃ。植よ、このことをわかつてくれ)

「七歩の詩」の章より 側近に阻まれた兄弟の情

「七歩の詩」は日本人にもよく知られています。特に、中国語学習者は何度か習っています。『曹操』にも記述があります。『曹操残夢』から引用します。

丕と植は仲が悪くなかったが、どちらも自分の周囲に側近がいて、それに後宮の意見もからんで、兄弟二人が親密になる機会はなかったのである。

この二人にかんしては、跡目を争ったことが必要以上に大きく伝わっている。しかもこの争いは丕の勝利に帰し、植の立場からは、兄にいじめられた哀れな弟という面がことさらに強調されてきた。

曹丕は禅譲という形にしても、漢を乗っ取ったという悪役イメージが払拭されない。敗北した曹植のほうに、どうしても同情が集まったのである。

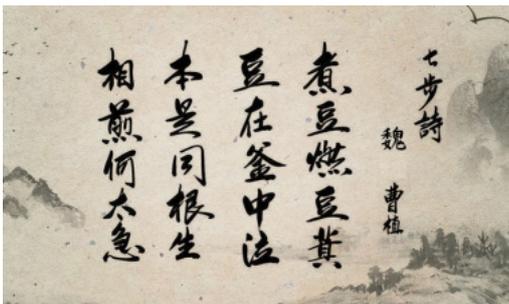
「七歩の詩」という伝説がある。曹丕が弟の曹植に、七歩のうち詩を作れ、できなければ処罰すると命じた。植は即座に「七歩の詩」を作ったと伝えられている。

豆を煮てもって羹となし
豉(醃酵させた豆)を漉して
もって汁となす

其は釜の下にありて燃え
豆は釜の中にありて泣く
本と是れ同根に生じたるに
相煎煎ること何ぞ太だしく
急なる

これは劉義慶(四〇二-四四四)の逸話集『世說新語』に載っているが、曹植の詩集のどこにも出ていない。

おそらく、いにしえの小説家のたぐいが、曹丕と曹植の争いにヒントを得て創作したものであろう。ただ今にいたるも、この詩が曹植の作であると信じられ、どうやら唐の詩聖李白もその一人であつたらしい。



twitter.com/hashtag/より

魏皇帝、哀れな三代 ③曹芳、④曹髦、⑤曹奂

魏の皇帝で実際、皇帝として実権をもったのは丕(文帝)、叡(明帝)の二代で、あとは、司馬家の制御下にあつた。

漢最後の皇后節は、いま洛陽郊外に住んでいる。

皇帝曹髦は成年を迎えると、女色に溺れたふりをした曹芳とちがつて、あからさまに司馬家の専横を憎む言動が目立ちはじめようになった。

「このわたしの耳に入るくらいですから、危ないですね。やっぱりあなたは賢明でした」
山陽公夫人の節が、廢帝の芳に言った。(中略)

「賢明ですか。……」
芳は苦笑した。(中略)

「そうですね、子建(植)さまはご存知のように、お酒に溺れたふりをしましたわ。賢明でしたね、あなたも」
と節は言った。(346、347頁)

③芳は女色で廢帝となり、④髦は司馬氏に対して武力抵抗を發動しようとして露見、混乱のなかで没し、⑤奂はしづかに幕をひいた。

陳舜臣さん最後の小説、珠玉の名作『曹操残夢 魏の曹一族』

単行本の帯評に「名篇『曹操』以後を描く壮大な叙事詩」とありますが、『曹操残夢』には、冷たい冬の日の穏やかな日差しに似た、引き締まった、そしてぬくもりのある「抒情」の描写もちりばめられています。

紅珠と甄氏、「存霊」二人

『曹操残夢』に「存霊(死んでいないのに死んだことになっている人)」という言葉がでてきます。そして、この言葉で指される紅珠と甄氏が共に重要な役柄を演じます。

まず、紅珠です。曹操に、宋奇という貴族に嫁いでいる紅珠という従妹がいました。曹操は少年時代、紅珠が好きだったので、紅珠も曹姓で、妻にすることは叶いませませんでした。その紅珠が政争に巻き込まれ、身が危うくなったとき、曹操は、父曹嵩の指示で、「奪う」という形で紅珠の命を救います。

次は甄氏です。二〇四年、曹操が鄴を攻め落したとき、曹丕は、袁紹の次男袁熙の妻甄氏を奪い妻とします。丕は甄氏を愛し、甄氏は叡(魏の二代明帝)をもうけます。しかし、曹丕の寵愛は次第に薄れ、甄氏は恨み言を述べ、丕の怒りに触れます。二二一年、死を賜われます。表向きはそうだったのですが、甄氏は生かされ、その身は宙によって、山陽県に住まう宙の母紅珠のもとへ移されます。

魏の山陽公となった漢の廢帝劉協の近くに俗世を離れた人たちが集まってきます

廢帝劉協が移された山陽とは河南省北部で、現在の地名でいえば修武県の西部にあたる。太行山脈の山なみの南に位置し、いかにも僻地らしい。

山陽の小高い所に、住居がある。それはどこからも見えるということで、山陽公邸は出入りを監視されているのだ。

そこへ宙の警固で、甄氏が訪ねて来た。甄氏は宙の母紅珠の住居の近くに庵を与えられた。その日の山陽公訪問にも、紅珠はつき添ったのである。

山陽公夫人は曹操の娘だから、紅珠とは血がつながっている。共通の話題も多かったにちがいない。(79頁)

このようにして、山陽公(廢帝劉協)、その夫人・節、そして、存霊の紅珠と甄氏を加え、四人が近くで暮らすこととなります。

曹植の、甄氏への「恋慕の情」が『曹操残夢』の太い縦系の一本

曹植は山陽公を訪問したあと、二人の存霊の住む庵にむかった。

甄夫人は植が十三歳のとき、敵将袁熙の妻であったのが、とらわれて兄丕の妻となった。それ以来、少年植にとっては、あこがれの人だったのである。四十一歳になる今もそれには変わりはない。(中略) 甄夫人の前に出るまで、植はほとんど無我夢中であった。少年時代から、この嫂と顔を合わせるたびに、よく目がくらんだものである。半ば目がくらんだときが、喜悦のはじまりで、それを思ったただけで、からだがふるえた。(239頁)

この日、植は幻覚を見ているのか、椅子から立ち、ふらふらしな

から両手を前に出してなにかをさぐるようなしぐさをしたり、また坐ったり、甄夫人の前で異様な行動をした。

彼の動きが完全に静止すると、それを待っていたように甄夫人はしずかに椅子から立ちあがった。一步また一步と、彼女は前に出る。彼女のなかに、この動きをもたらず力らしいものは、一切ないようであった。彼女はまるでそよ風に吹かれているように動いている。

植のひろげた両手は、一人の人間をそのなかに抱え込むだけのひろさをつくっていた。風に吹かれた甄夫人は、なんのためらいもなく、その空間にからだをすべり込ませた。二人は抱き合った形になった。

その瞬間、二人は目をとじて、なんの感情も外にあらわさなかった。人によっては、それを恍惚の極致と見るかもしれない。(246頁)

曹植は二二二二年、山陽において失神、命はとりとめませんが言語不自由となり、そのまま封地の陳に赴きます。

そして、同年、甄夫人はみまかり、植も、あとを追うように、陳でその生涯を閉じます。



→ 山東省聊城市東阿県にある曹植墓